
情報改革と情報化

前書きまたはアリバイ

何か発表しないといけないということで、せっかく、あんまり社会的責任の薄い学生のあつまり(でもなくなってきたのだけ)だから、ちょっと無責任だけど、新鮮味のある議論がしたいなあと思い、中原君に「マクロな情報教育論」みたいなワードをだしたところ、藤田英典先生の「教育改革」の1章を押し付けられました。以下は、それを読んだ僕のエッセイみたいなものなのですが、ちょっとお耳を傾けていただき、ご意見いただければと思います。と、これくらい書いておけば、責任能力が問われなくなるかなということで、アリバイ工作おわり。

0 . 教育改革の中の情報教育

日本の教育の全体的な視点からみると、情報教育は教育改革の一課題として位置づくだろう。文部省の「教育改革プログラム」の中で、情報教育は、「学校の教育内容の再構築」、「情報化の進展への対応」としてとりあげられている。しかし、情報教育の目的、内容は明確にされないまま、ただ改革の項目としてあげられるばかりである。例えば、教育改革の大目的のうち「心の教育の充実(ゆとりと生きる力)」は情報教育に大いに関連するように思われるが、では具体的にどう関係するのだろうか?以下では、情報教育に関する私の二つの違和感から出発して、藤田の枠組みを用いて「情報教育」を支える価値を整理し、そこから、現場、教師の抱える問題を検討する。

1 . 情報教育なるもの その広義 - 狭義問題

そもそも情報教育とは何か?私の第一の違和感はこの語の多義性である。よく困るのが、この語の翻訳(もしくはComputer in Educationなどの語の和訳)である。一般に、通常教科での情報手段の活用も指し、情報化への対応も指す広い意味をもつ語である。しかし、私がここで取り上げたいのは、この2つの同居よりも、情報化への対応の中の、情報手段の適切に利用する能力の育成だとか、情報化社会のモラルの育成だとかのいろいろな意味の同居への困惑である。(ちなみに情報教育という語が、後述の情報活用能力とともに何ゆえか(知識不足でこれはいろいろ事情があるのか、当然のことなのか分かりません。)指導要領では使われないという点も触れておくべきだろう。前回の指導要領に関しては、「情報教育に関する手引」にて、情報教育の内容と、指導要領との関わりが示されるという形で教育現場に知らされている。)

この違和感はどこから来るのであろうか?私はこの理由を「情報教育に関する手引き」の序文に端的にみる。

「まず問題となるのは情報教育の範囲の設定である。「情報」というのはきわめて広い概念である。(略)少なくとも人間が文化として作り上げてきた情報の授受や処理や手段やメカニズムに関する教育は、すべて情報教育だというのは、理論的には成り立つ議論である。ただそうすると、(略)従来の教育内容のきわめて多くの部分が情報教育にほかならないということになる。そうなると、今新しく情報教育が急務であるとされている問題意識から、焦点がずれてしまう。それと対照的に領域を狭く取り、急速に発達し現代社会における情報処理の最も主要な手段となっているコンピュータにかかわる教育に限定して考えるべきだという立場も成り立つ。そう考えると問題が具体

的になりカリキュラム化もしやすい。(略)だが、現在、我々が用いているコンピュータのハードウェアやソフトウェアにとらわれていたのでは、その情報教育の成果はやがて、一般の人々にとってあまり有用でないものになってしまうだろう。(略)これから必要とされるのは、既存のコンピュータに適應する能力だけでなく、コンピュータによって開かれた新しい社会状況、すなわち高度情報化社会に適切に対応できる情報活用能力である。そこで、情報教育は、現在抱えている問題を的確にとらえながら、これから起こってくる問題にも臨機に対応できる柔軟性をもって進められなければならない。」

上の文章によれば、情報教育とは何かといったときに、情報を広義に解釈し、これまでの教育内容のほとんどに関わる教育を指すこと、また、狭義に解釈し、陳腐しやすい先端の技術の教育を指すことの2つを避けるために、コンピュータによって開かれた新しい社会状況、すなわち高度情報化社会に対応する情報活用能力を育成するものを、情報教育している。

しかしながら、「コンピュータ社会によって開かれた新しい社会状況」において取り扱われる「情報」とは、時間の軸で言えば、最先端のものから、何千年前のものまで制限されるものではない。果たして、情報活用能力を主眼にすることで上の広義 狭義問題は回避できるのだろうか?このロジックでは、最終的に「情報」は定義されていないように思われる。後述するように情報活用能力にはある定義が行われているが、基本的にそれは「情報」を活用する能力であり、すなわち、「情報」の定義なしには形式的な意味しかもたないのではないか。

おそらく次の指導要領に対する「情報教育の手引」的なものの中心的な考え方となるであろう、98年8月の「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 最終報告」のはじめに以下のような記述がある。

現在の学校現場では、コンピュータや情報通信ネットワーク等の情報手段を教育活動に使っていれば、それはすべて情報教育であると考えている場合もある。しかし、例えば、コンピュータを利用して算数でドリル学習をすることなどは、あくまでも算数・数学の目標を達成するための教育であって、「情報活用能力」の育成を主たるねらいとした教育とは区別すべきである。教育活動が効果をあげるには、教員が明確に目標を意識し、その達成に向けた意図的、計画的教育活動を編成することが不可欠だからである。逆に言えば、各教科等においても、「情報活用能力」の育成を目標とした教育活動は可能であり、また必要である。

冒頭では現場の取り組みの不適切さを否めるようにもとれる表現が使われている。だが、そもそも、(そんなことが可能であるのか自体が疑わしいが)広義の情報か、狭義の情報かの問題が解決しないなら、つまり、「算数・数学」で扱われる内容のどれが「情報」で、どれが「情報」でないのかが明確でないならば、上記のような現場の混乱とは、情報教育の本質的な姿であるといえる。情報の広義 - 狭義問題は未だ情報教育の根底に潜んでいるのである。

2 . 情報活用能力なるもの 古くて新しい、いわば、「変わらぬ」力

では、情報活用能力とは何かといえ、上の報告では、「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」とされている。ここで、情報活用能力の実践

力とは、「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力とされている。

ここに私は第二の違和感を覚える。情報活用能力の実践力の中に描かれる、主体的に活動し、自ら情報を加工し、新しい地平を切り開いていく子ども像（そんな人間ばかりの社会って、、という危惧というか空想は横においておいて）とは、高度情報化社会うんぬんを持ち出さなくとも、あらゆる時代に求められてきた人物像ではないのだろうか。むろん、日本の学校教育の文脈の中では何らかの新味をもつ人物像なのかも知れないし（すみません、ここらへんは知識不足です。）背後に大きな知識観の転換もあるのかも知れないが、上記のような力は、はるか昔から存在し、人類の歴史を大きく切り開いてきたことは確かだろう。また、この語からは、主体性、判断力、（処理）技術、創造性、自己教育力、といった教育一般で語られる用語を容易に連想できる。第二の違和感とは、換言すれば、情報活用能力に対する既視感である。

2つの違和感によって、私の前の情報教育は、ほとんどその輪郭を失いかける。しかし、このような定義の不十分さをはらみつつも、情報教育はまた、日々現場の中で実践され、作り上げられているものでもある。私が再び情報教育のを見つけるためにここで注目したいのが情報教育の実践を支える多様な価値である。教師たちが、情報教育に意義を感じ、それに取り組み成し遂げるとき、彼らは、何らかの価値を確かな目指すべきものと設定し、実現しているのだということが出来る。では、いかなる価値が彼らを支えられているのだろうか？このような現場の教師を取り囲む「価値」を整理し、そこから「情報教育」を再構築することはできないだろうか。（なお、以下では、情報教育を、単純にコンピュータを使う教育とする。）

3 . 情報教育を推進する「価値」の見取り図

藤田が拡張した D・ベルの枠組みを用いて、情報教育を推進する価値を以下のように整理することができる。

表 1

中軸原則	情報教育を推進する価値
経済〔効率〕	情報産業を支える人材の供給。情報化社会の消費者の養成
政治〔平等〕	情報化社会に対応できる力を皆に
文化〔自己実現〕	主体的な学習活動。パソコンでたのしい授業。新しい力の発揮
コミュニティ〔共生〕	コンピュータでつながる。よりよい情報化社会の構築（モラル）

ところで、表 1 であげた情報教育を推進する価値とは、教育を受ける側に関するものである。教師に視線を転じたとき、さらに次のような表を作ることができるだろう。

表 2

中軸原則	教師という視点から見た情報教育を推進する価値
経済〔効率〕	授業に用いて効率を上げる
政治〔平等〕	同僚と同等の質の授業を行う
文化〔自己実現〕	今までにないような新しい授業。オリジナリティの高い授業
コミュニティ〔共生〕	教師同士がつながる

こうして「情報教育」は多元的な価値の複合体としての姿を現す。このとき、情報教育の推進とは複合的な価値の実現ということになる。しかし、D・ベル、藤田、の指摘

するように、これらの価値はリズムを異にする。つまり価値間の矛盾が生まれる。

4 . 価値間の葛藤 情報化の中の教師につきつけられているもの

上の表を手がかりに情報教育の実践の中で生じうる葛藤を整理してみると、次の2つのような整理が考えられる。

表3 (表1から)

	突出して重んじられる価値			
	効率	平等	自己実現	共生
効率	情報産業を支える優れた人材の育成	単なるユーザー利用しか学べない。	情報産業に必要なスキルが効率的には身につかない。	経済活動にさく時間が、少なくなる。
平等	コンピュータを使うのは、優れた力をもつものだけ。	家にコンピュータがある子もない子もみな等しく利用できる。	興味のない子は使わないでいい。	コンピュータをもたないものスキルの低いものは、その公共圏から排除される。
自己実現	非経済的だと判断されるコンピュータの利用が禁じられる。	コンピュータマニアという個性がなくなり、ヤル気なくなる。	コンピュータを使って、自身の興味のままに、楽しいことができる。	思いのままにコンピュータを操ることができない。
共生	専門家と素人という2分	均質で交流の意味が薄くなる	蛸壺化。	ネットなどに新しい公共空間を築ける

表4 (表2から)

	突出して重んじられる価値			
	効率	平等	自己実現	共生
効率	授業がはかどり、時間に余裕ができる。	より効率の高い利用が禁じられる。	準備が大変。	付き合いが大変で、効率が下がる。
平等	コンピュータで効率を上げられない教師との不均等	コンピュータを利用した授業が日本全国で同質で行われる	ちゃんと努力して使えよなという感情、だとか、私も使わなきゃというあせり	スキルの低い教師は、周辺においやられる。
自己実現	授業が固定化されていく	オリジナリティのある授業が禁じられる。	教師が、コンピュータを活用した魅力の高い授業を行う。	共同的な問題解決により、個人的な問題意識の追究が疎外される。
共生	経済的な目的のみ求めるような共生。例えば文書のコピーとか。	決まった用い方をすればいいので、共生の中で解決すべき問題がなくなる。	人の実践には口がだせなくなり、相互批判の価値が薄まる。	教師同士が、ネットなどに新しい公共圏をつくる。

ここから、情報教育の実践が常に、矛盾をはらんだ活動であることを自覚しつつ、4つ価値のバランスの目指した実践を生み出すという、今後、情報教育の実践に取り組む際の、目指すべき方向が示唆される。このような観点が、教師が無言のうちに耐えなければならない圧力を可視化し、そこからの開放へと歩みをすすめる足がかりとなりえないだろうか。